様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５９２４４８
研究課題名（和文）　認知症の種類別ＢＰＳＤ（入浴困難、徘徊、収集癖）の比較による看護援助開発

研究課題名（英文）　Development of nursing method for intervention in dementia compared BPSD (bathing-related behavioral issue, wandering, and collectionism)

研究代表者　高山　成子（TAKAYAMA　SHIGEKO）
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号　30163322

研究成果の概要：
血管性認知症とアルツハイマー病の疾患が、収集癖（収集行動と称す）、徘徊、入浴困難時の認知症高齢者の言動や思いにどのように影響し、どのような違いが表れるのかを明らかにすることを目的に参加観察法で 50 名に調査した。重症度と年齢、性を合わせて分析した結果、血管性認知症高齢者はアルツハイマ-病高齢者に比し､短期記憶や意味記憶､人の記憶が維持され、そのことが収集物品回収時の反応や徘徊タイプ､入浴時の攻撃言動の違いとして現われていた。

交付額　（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	600,000	3,500,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域老年看護学
キーワード：看護学　老化　認知症　ケア

１．研究開始当初の背景

認知症の重症度と種類は、認知症の行動・心理症状（ＢＰＳＤ）の基本的な関連要因とされるが、これらがどのように彼らの思いや行動を変化させているのか、それらを看護者がどのように査定するのか、どのように対応するのかについてまだ標準化されていない。

我々は、ＢＰＳＤのなかで①物品が介在する「収集行動」、②生活のなかで様々な目的で歩く「徘徊」、③習慣や好みに深く関与する「入浴」の 3 つに焦点を当て平成 15-17 年科研費助成研究から調査を継続してきた。本研究は認知症の短期記憶障害を踏まえ、行動しているその時に付き添い、行動観察と共に思いを聞くことを特徴としている。研究結果では 3 つの行動の共通点として、①殆どの行動に意味や目的があり、これらの行動は彼らのニーズの表れである、②中核症状である記憶障害が行動の変化に深く影響し、重症度による違いが大きいことが明らかとなった。

この調査の中で脳血管性疾患である血管性認知症（VaD）と変性疾患であるアルツハイマー病(AD)の行動変化が異なっているとの観察を得た。VaD と AD は鑑別の困難さが言われながらも発生機序の違いから、その現われ方に大きな違いがあると推察できる。しかし、どのような違いがあるのかについて行動と思いの両方から調査した研究はない。

行動と思いの両方を重要視した観察結果と重症度をそろえた分析結果から、AD と VaD の違いを明らかにできれば、標準的な看護方法を策定する資料になると考える。

２．研究の目的

VaD と AD 高齢者の収集行動、徘徊、入浴困難時の行動、認識、思いにおける共通点と相違点を、重症度や年齢、性別を合わせた対照比較により明確にする。

３．研究の方法

(1) 調査場所・対象

認知症専門療養病院 1 施設、老健施設認知症病棟 3 施設に入院（所）中で以下の基準に該当する認知症高齢者を対象とした。

①認知症の種類が診断されている

②スタッフが徘徊、収集行動、入浴困難があると判断している

(2) 調査方法

原則 3 日間の参加観察法で、収集行動、徘徊は調査者が共に行動して観察した。入浴は調査者が誘導～脱衣を援助して観察した。

(3) 分析方法

観察内容を逐語化し、平成 15－17 年科研費研究で抽出した各行動を特徴づける分析視点に基づき、本人の認識・思いに着目して重症度と年齢、性別を合わせて AD と VaD を比較した。

①収集行動

収集過程における「物品の認識・用途」「物品所有者の認識」「収集場所の認識」「物品回収時の反応」の 4 視点で比較した。

②徘徊

歩行目的別の 8 つの徘徊タイプの有無を比較した。タイプは「勤勉性」「帰宅願望性」「親密性」「生理的要因性」「無目的」「娯楽性」「探索性」「社会性」の 8 つである。

③入浴困難

誘導、脱衣、体洗い・洗髪、浴槽に入る、着衣の行動過程の拒否・攻撃言動の強度と入浴記憶の有無を比較し、場面も比較した。

(4) 倫理的配慮

県立広島大学倫理委員会の審査を得た。施設長の同意を得、認知症患者に説明を行い、成年後見制度を踏まえ家族の同意書を得た。

４．研究成果

全調査対象者数は 50 名であった（表 1）

表 1.調査を行った対象者

	収集行動	徘徊	入浴困難
AD	4	10	15
VaD	4	7	6
その他*	0	0	4
計	8	17	25

*その他：混合性認知症、レビ-小体病、正常圧水頭症による認知症

(1) 収集行動

軽度（AD1 名：VaD2 名）と中等度（AD3 名、VaD2 名）別に 4 つの視点で比較した。

①軽度認知症高齢者の共通点・相違点

AD と VaD の共通点は、【収集物品の認識】が両方共正確で、反対に【物品所有者の認識】は両方ともに正確でなかった点である。このことは軽度では AD、VaD ともに、「これ（物）は何をするものか」と言う視覚的形態と繰り返しの体験情報で刻み込まれた意味記憶が残っていることを示した。逆に、「これ（物）は誰のものなのか」と所有者を記憶する短期記憶は AD、VaD ともに初期（軽度）から障害されることが示された。

相違点は、2 点で、【収集場所の認識】で AD は正確でなかったが、VaD は「（紙は）トイレから持ってきた」と正確であったこと、【回収時の反応】でも AD は物品回収後に回収した相手やその時の思いを後で説明したりすることがなかったが、VaD は「看護師が持って行くのは（私には）どうにもならん」と回収した相手や自分の行動の理由を述べたことであった。

VaD は AD に比し、物品を手に入れた場所や回収時に関係を持った相手の記憶を残しているだけでなく、その相手と自分の立場を認識する能力を残していると考えられた。

表 2.軽度認知症高齢者

	物品の認識	所有認識	場所の認識	回収時の反応
AD	○「雑誌」を「読むもの」	×孫のもの	×家からもってきた	回収に拒否.何かのきっかけで返却する場合もあった
VAD	○「紙」を「便所で使う」	×自分のもの	○紙はトイレから持ってきた	回収に拒否。回収に応じて自分の行動の理由を述べた。

②中等度認知症高齢者の共通点・相違点

AD は、中等度で【物品の認識・用途】の意味記憶の正確性が軽度より低下していた。しかし、VaD は中等度においても軽度同様【物品の認識・用途】と【収集場所の認識】の短期記憶ともに正確で、【回収時の反応】でも軽度と同様に回収後に「すいません。言うけど（あれ）私のよ」と回収されたことと同時に所有者の記憶を残していた。

以上、軽度と中等度の AD と VaD の比較により、AD に比べて VaD は進行しても意味記憶、短期記憶、人の記憶など記憶に関する全般的能力が残されていた。物品の認識や所有者の認識の違いは質問によってのみ明らかになった違いであるが、物品回収時の反応は援助者が直接的に受ける反応である。この反応の違いが、VaD の疾患の違いによる記憶能力の高さによると理解することで、対応の違いにつながると考えられる。

表 3.中等度認知症高齢者
○他者から見て正確　×他者から見て間違い

	物品の認識	所有の認識	場所の認識	回収時の反応
AD	×「タオル」を「財布」	×孫のもの	×家からもってきた	回収に拒否。何かのきっかけで返却する場合もあった。
VAD	○「紙」を「トイレで使う」	×自分のもの	○（紙は）詰所で貰った	回収は拒否。回収に応じた後、自分の訴えたいことを言う。

(2) 徘徊

対象は VaD7 名(軽度 0、中等度 5、重度 2)、AD10 名(軽度 0、中等度 4、重度 6) である。

徘徊は歩行過剰を意味し、その行動には殆ど目的があり、目的の多さは生活の内面の多彩さを示すと考えられた（平成 15-17 科研費助成費研究)。

重症度と年齢、性を合わせて、中等度 80 歳代女性（AD2 名、VaD3 名)、重度 76～83 歳男性（AD3 名、VaD1 名)、重度 80 歳代女性(AD3 名、VaD1 名)で比較した(表 4)。

①徘徊タイプによる共通点および相違点

「探索性」は「義歯を紛失して職員に尋ねた」1 名であったため除き、7 タイプを比較した。

年齢、性別に関わらず両者に共通してみられたのは、「勤勉性」「親密性」「生理的要因性」「無目的」で、違いが見られたのは、「帰宅願望性」「娯楽性」「社会性」であった。

「帰宅願望性」は「家へ帰る」と歩き回る徘徊で AD のみに見られ、「娯楽性」はテレビを見る、旅行へ行く、窓から退所後住む家を眺めるという目的の徘徊で VaD のみに見られた。また、「社会性」はゴミを捨てる、食事の準備の目的での徘徊で、これも VaD のみに見られた。これらは重症度や年齢、性別に関わらなかった。

AD の「帰宅願望性」は「ここがどこか」「何のためにここにいるか」の場所失見当識に基づく状況認識や短期記憶障害があるためと考えられ、VaD の「娯楽性」「社会性」は過去の記憶や習慣を記憶している、周囲の人との関係の記憶が残されていることを示していると考えられた。

②重症度及び性別の AD と VaD の比較

徘徊時の状況内容 19 項目について中等度と重度で比較した。中等度では AD は 8 項目 VaD は 13 項目が見られた。VaD は対象者が 7 名と少ないにも関わらず 13 項目の内容が見られたことは、AD に比べ VaD は記憶障害も少なく多彩な生活を営んでいることを示している。しかし重度になると、VaD でも該当数は 6-7 に減少した。これは VaD の基礎疾患の脳血管障害による ADL 低下や意欲低下が関連しているのかもしれない。

重度の性別の比較では違いはなかった。進行すると認知症による脳の障害が広範囲になり AD と VaD の症状の違いが少なくなると言われており、今回分析できなかった中等度で性別の違いが大きい可能性が推察された。

表 4.　徘徊行動タイプ別の比較
○：徘徊時の状況が認められる　　－：徘徊時の状況が認められない

徘徊のタイプ	徘徊時の状況内容 19 項目	中等度		重度			
		AD	VaD	AD	VaD	AD	VaD
		80 歳代女性		76～83 歳男性		80 歳代女性	
勤勉性	・仕事	○	○	○	○	－	－
	・育児	○	○	－	－	○	－
	・仕事探し	○	－	○	－	○	－
帰宅願望性	・帰る	○	－	○	－	○	－
親密性	・誰かに会う	○	○	－	○	○	－
	・他者と関る	○	○	－	○	－	○
生理的要因性	・排泄	－	○	○	○	○	○
	・身体的異変	－	－	○	－	－	－
	・飲食の欲求	－	－	○	－	○	－
	・感情的	－	○	－	－	○	－
	・清潔	－	－	－	－	－	○
	・休息	－	○	－	－	－	－
	・暑い	－	○	－	－	－	－
無目的	・説明できない	○	○	○	○	○	－
娯楽性	・趣味	－	○	－	○	－	○
	・気分転換	－	○	－	－	－	○
	・楽しみ	－	－	－	－	－	○
探索性	・探索	－	○	－	－	－	－
社会性	・整理、準備	－	○	－	－	－	○
計		7	13	7	6	8	7

(3) 入浴困難

調査者 25 名のうち混合性認知症など除き 21 名（AD15 名、VaD6 名）を分析対象とした。

表 5. 入浴困難分析対象者

	AD	VaD	計
軽度	3 { 男性1 女性2	3 { 男性1 女性2	6
中等度	7 { 男性1 女性6	1 { 男性0 女性1	8
重度	5 女性5	2 女性2	7
計	15	6	21

AD と VaD の比較は次の 2 つの方法で行った。

①重症度別に入浴誘導～着衣までの行動過程での拒否や攻撃言動の有無を比較

②重症度と性別を合わせ、中等度女性 80 代 1 組（AD:82 歳・HDS-R7 点、VaD:87 歳・HDS-R6 点）の入浴時の言動の比較

①拒否・攻撃言動の AD と VaD の比較

重症度別の AD と VaD の比較から次のことがわかった。

・調査対象は病棟スタッフが経常的に強度の入浴拒否があると判断した入院（所）者である。VaD では調査者の誘導に 6 名全員がスタッフの援助と同様の強度の拒否を示した。

しかし VaD では強度の拒否は 15 名中 8 名で 7 名は入浴を承諾した。これは、AD は「服がない」「お金がないから」などの理由で入浴を拒否するため誘導者の時間的余裕による待つ姿勢や説明により気持ちが変わる可能性が高い。が、VaD は過去の体験や強いこだわりを理由に拒否するため援助者の違いや説明で入浴を承諾することが少ないと考えられた。

・軽度では AD、VaD 共に脱衣以降の行動で強度の攻撃現言動は少ない。が、中等度・重度では AD のみ強度の攻撃言動があった。

・VaD はどの重症度においても、誘導時に強度に拒否しても、入浴を承諾すると脱衣・体洗い・洗髪以後は強度の攻撃行動はない。しかしながら軽度の攻撃言動（不機嫌な顔、文句など）はみられた。表 6 の入浴後の記憶が VaD 全員が詳細な記憶ありであったことから、納得していない可能性が示された。

・AD は、誘導時に強度の拒否があっても、そのあと機嫌よく経過する場合と、強度の攻撃言動が発生する場合があった。強度の攻撃言動は体洗い・洗髪及び浴槽に入る際の湯温刺激に対してであった。AD は次の行動を予測する力が低下するためと考えられ、その時々に合わせた丁寧な対応が重要であることを示した。

表 6. 重症度別、AD/VaD 別入浴行動過程における攻撃的言動

○:特に拒否・攻撃言動なし, △:軽度の拒否・攻撃言動あり従わない, ▲:強度の拒否・攻撃あり従わない

重症度	型	援助回数	性	年齢	MMSE	拒否、攻撃行動					記憶*
						誘導時	脱衣	体洗い・洗髪	浴槽	着衣	
軽度 6	VaD	2	女	80	20	▲▲▲	○○○	○○○	○○○	○○○	有有有
		3	女	83	22	▲△△	△△△	○○○	○○○	△○○	有有有
		3	男	86	19	▲▲▲	△△△	△△△	△△△	○○○	有有有
	AD	3	男	59	19	▲○○	▲△○	—△○	—○○	—○○	—？？
		3	女	86	15	△△○	○○○	△○○	○○○	○○○	有有有
		3	女	77	15	△△○	○○○	○○○	○○○	○○○	有有有
中等度 8	VaD	1	女	87	10	▲	▲	△	△	△	有
	AD	2	女	80	13	▲○	○○	○○	○○	○○	有有有
		3	女	80	13	○△○	○○○	○○△	○○○	○○○	有有有
		3	女	82	12	▲▲▲	△○○	○○○	△△△	△△○	？有有
		3	女	90	10	▲△▲	△△○	△○△	△○○	△○○	有有無
		3	女	92	10	△○○	○○○	△▲▲	▲○○	○△△	無
		3	女	84	9	▲▲▲	▲▲▲	△▲○	○○○	△○○	無有有
		3	男	76	9	△○△	○○○	○○○	○○○	○○○	有有有
重度 7	VaD	1	女	89	0	▲	△	○	○	○	有
		3	女	83	0	▲▲▲	△△△	△△○	△△△	○○○	有有有
	AD	1	女	79	6	▲	△	▲	○	○	無
		3	男	82	0	▲△▲	▲△▲	△▲▲	△▲△	△△▲	？？？
		3	女	80	0	△△○	△○○	○○△	○○○	○○○	無無無
		3	女	80	0	▲▲△	▲▲▲	△— ▲	○—○	○—○	？— 無
		3	女	80	0	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	

＊入浴直後に入浴したかどうかを質問した。

②重症度・性・年齢を合わせた入浴行動時の言動の比較（中等度・女性・80代）

表7.8の場面を比較し、以下の相違点を抽出した。

・VaDの事例では、無理強いされた（と思った）施設での体験の記憶が拒否理由になっている。そのため納得を得るのは難しい。(波線)

・AD の事例で、一連の行動全体の理解が低下するためか、次の行動予測が低下し「次何するの？」と不安、戸惑いがある(傍線)。

逆に、VaD事例では一連の行動が理解できているため、浴室へ行く前段階（居室）で強度の拒否を示す。ただし、浴室へ入ったあとは、諦めによるものか大声で騒がない。が、記憶があるため機嫌は良くならない（傍線)。納得を得る援助を実践しない限り悪循環をきたす恐れがある。

・VaD事例は、語彙が多く、論理的に話す能力が維持されて多彩な言い回しで主張する。そのため、援助者は「頑固な人」と思う傾向がある（点線)。

逆にAD事例は、語彙が減少して指示語や「はい」が多く、援助者は納得していると思う傾向がある(点線)

・AD 事例は洗ったことを忘れ、行動を繰り返した。これは、短期記憶障害によるもので、「洗った」と説明しても納得を得るのは難しく、援助者がADの障害につながる行動を予測して、上手な誘導法を考え援助する必要がある。

表7.　AD高齢者の言動
（女性　82歳、HDS-R7点）

調査者:お風呂に入ろうって言ってますよ
対象者:もう帰るけ。今日家帰って入る（不機嫌）
調査者:行ってみましょう
対象者:帰るけ、ええわ。(不機嫌)
調査者:私が、服の準備しましょうか?
対象者:もう、先にあこ行って下さい（怒りだす）
調査者:一緒に、お願いします
対象者:やれ、これじゃまあまあ、はい。
（笑い、脱衣室へついてくる）
対象者:ハイハイ　ここでどうするん？
調査者:服、脱ぎましょう(脱衣し、体洗い、洗髪)。
調査者（湯船に）長くたったからでましょうか
対象者:ぬくもってないのに。もうでるん?
調査者:もう5分くらい入ってますよ
対象者:家じゃらゆっくり入るのになあ
調査者:（12分経過する)もうでましょう
対象者:でにゃあいけん？まだ入りたいがだめ？
調査者:もうでましょうか？
象者:やれやれ(また、ｼｬﾜｰﾁｪｱｰに座ろうとする)
調査者:脱衣所にいきましょう
対象者:いやー、ここに。(繰り返すが、腕をとると一緒に脱衣室へ。)
入浴後「極楽じゃわー、勿体ないわ、家帰ったら、近所に昼からって言われるわ」と機嫌がよい。

表8.VaD高齢者の言動
（女性　87歳、HDS-R7点）

調査者:風呂行きましょう
対象者:いけんのよ。(険しい顔つき)
調査者:じゃ、車椅子で私と一緒に行きましょう
対象者:いけん、もう風邪ひいた。人が行かん言うもん、何か、悪なったらどうするの。(怒る)
調査者:お洋服だけでも--
対象者:なんかあったら,どうするの?（睨む）
スタッフが、「風呂にきてください」と言う。
対象者:あーいや、もう（大声になる）なによこの前も二人で。無茶苦茶言う.風呂場下りんよ。
調査者:でも、お風呂が--
対象者:そんなこと（声を遮って怒る）この前も２回も無理にしてからに-。あんた医者やなかろう？。そんで熱だしたらどうなる？いかん。
スタッフが「まーそう言わずに」と言う
対象者:この前も２回そう言って無理言うて、もう、いや、何でしつこく言うんや。自分の体にあわせているのに、それ聞いとくれんと無茶いうて。もしなんかあったらしりません。
調査者:１週間入っていないので--。
対象者:娘のとこで風呂入るんです。そんなこと言うとよけい病気になる。しつこいほんま。(ソファから立ち、車椅子へ誘導されようとするとソファにしがみつき、蹴る、騒ぐ)
（車椅子で浴室へ。それ以後は騒がないが、不機嫌に睨む。入浴後「また無理に入れて」と言う。

(4) 収集行動、徘徊、入浴困難の共通点

①　3つの行動において、AD,VaDともに重症度による変化は明らかであった。しかし、収集行動に表れる変化、徘徊に現れる変化、入浴行動に表れる変化の様相は異なっていた。各行動の意味、例えば、収集行動とは「物品と言う視覚的情報、触覚的情報が介在する行動」など行動の意味が説明できれば、認知症の障害がどのような行動の場合に、どのように変化させるかが整理できると考えられた。そのことにより、行動の意味に合わせた適切な対応方法を明らかにできると考えられる。

②重症度を合わせてAD、VaDの行動を比較すると、違いは明らかであった。収集行動、徘徊、入浴行動ともに、ADに比しVaDは、同じ障害レベルであっても短期記憶障害が軽度で語彙が多く意思を表現できる、特に対人関係の記憶が残っていた。しかしながら、収集行動、徘徊、入浴行動時に、これら疾患による障害の違いが、どのように表れるかはそれぞれであった。収集行動においては、回収時の反応が違う、徘徊では歩く目的の内容が違う、入浴時では拒否理由が異なるために入浴行動全体における攻撃行動の現われる時点などが違うであ

った。
　各行動の中で現われる違いは、援助者がその障害の違い、その違いによる行動の現われ方の違いにまで理解が及ばないと適切な対応につながらないことが明らかであった。つまり、VaD が短期記憶などの記憶障害が少ないが、状況全体の認知力低下は低下することを理解していないと「頑固な人」「難しい人」と捉えたり、AD が記憶障害が前面に現れているものの、手続き記憶は残されていることを理解していないと、援助者主導で対応するなどの可能性が考えられる。

(5) 今後の課題
重症度の違いとともに、AD と VaD の違いが明らかとなり、さらに、行動の性質によってそのあらわれ方が異なること、これらを理解していないと認知症高齢者の行動そのものを理解できずに対応が適切でない可能性があることが明らかとなった。
　この結果に基づいて、収集行動、徘徊、入浴行動の意味付けを行い、エビデンスのある各行動別の対応マニュアルを作成して、検証を図って行くことが課題である。

５．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）
①SHIGEKO TAKAYAMA,HARUKA OTSU,YOUKO HANDA,Comparison between persons with Alzheimer's disease and those with non-Alzheimer's dementia concerning bathing-related behavioral issues,国際アルツハイマー病協会第 22 回国際会議,2006.10.12、ドイツ
② HARUKA OTSU, SHIGEKO TAKAYAMA,YOKO HANDA,Wandering Behavior in People in Nursing Homes and in Private Homes,国際アルツハイマー病協会第 22 回国際会議,2006.10.12,ドイツ
③Haruka Otsu, Shigeko Takayama, and Yoko Watanabe:
Wandering behavior in elderly people with Alzheimer´s Disease
in relation to the degree of impaired cognitive function.
23nd Conference of Alzheimer's Disease International (Caracas, Venezuela),
2007 年 10 月 10 日～2007 年 10 月 12 日.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計 0　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
高山　成子（SHIGEKO TAKAYAMA）
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号：30163322

(2)研究分担者

(3)連携研究者
渡辺(旧姓 半田) 陽子（YOKO WATANABE）
県立広島大学・保健福祉学部・助教
研究者番号：20364119

大津　美香（HARUKA OTSU）
青森県立保健大学・看護学科・助教
研究者番号：10382384